

荒井恵子

船橋三部作

—宝成寺・三番瀬・玉川—

令和3年度船橋市所蔵作品展
「荒井恵子 船橋三部作—宝成寺・三番瀬・玉川—」
2021(令和3)年12月7日(火)～19日(日)
船橋市民ギャラリー

主催
公益財団法人船橋市文化・スポーツ公社

目 次

| | |
|---------------------------------|----|
| 水墨画家 荒井恵子さんの仕事について 中川美彩緒…………… | 6 |
| 地域における現代美術の試み—荒井恵子の船橋三部作 山本雅美…… | 8 |
| 図版 | |
| 玉川…………… | 10 |
| 三番瀬…………… | 23 |
| 宝成寺…………… | 34 |
| 【対談】茂春山宝成寺住職 赤星隆誠×荒井恵子 …………… | 41 |
| 荒井恵子 プロフィール …………… | 44 |
| 図版リスト…………… | 45 |

謝 辞

本展覧会と図録制作にあたり、荒井恵子氏をはじめ、下記の関係各機関ならびに関係者の皆様方に多大なご協力を賜りました。ここにお名前を記すことのできなかつた皆様を含め、心より感謝申し上げます。

| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 荒井 恵子 | 石橋 泰弘 | 岩野市兵衛 | 平田美智子 | 杉田 茜 | 荒井 勇気 |
| 赤星 隆誠 | 畠山 武志 | 岩野麻貴子 | 竹口 朋子 | 星野 明世 | 荒井 美帆 |
| 鈴木 博喬 | 藤澤 浩士 | 小川 光一 | 瓜生 剛 | 日野原岳二 | |
| 建畠 哲 | 荒木 亮 | 佐藤 辰之 | 保母 哲 | | |
| 中川美彩緒 | 清水 聡典 | 樽谷 幸隆 | 松井 重憲 | | |
| 谷野 伸吾 | 木原 健児 | 加藤美恵子 | | | |

茂春山宝成寺
ふなばし三番瀬海浜公園
ふなばし三番瀬環境学習館
ミサトメディアミクス
Grandpa Graphics, Inc.
墨運堂

株式会社東武百貨店船橋店
株式会社堀内カラー
船橋市立葛飾中学校
船橋市立習志野台中学校
ギャラリーサンカイビ
(敬称略)

凡 例

- 本図録は令和3年度船橋市所蔵作品展「荒井恵子 船橋三部作—宝成寺・三番瀬・玉川—」のコンセプトブックとして編集した。
- p.10、p.24 及び p.34 の章解説の執筆は荒井恵子氏が担当した。また、p.22、p.33 及び p.40 は船橋市教育委員会学芸員 益子実華が担当した。

ごあいさつ

船橋市民ギャラリーでは、地域ゆかりの現代美術作家の活動と作品を紹介する展覧会として、市内にアトリエを構え活動する荒井恵子(1963年生)の個展を開催します。

荒井はこれまで墨と和紙を使った水墨表現により自身の感情や想いを抽象的に表現してきましたが、近年、作品と場所との関係性を探る映像作品や写真作品に取り組み始めました。本展覧会では地元「船橋」をモチーフとして制作した3つのシリーズを紹介します。

第1部では茂春山宝成寺の襖絵を展示します。同寺は西船橋にある曹洞宗の寺院で、徳川家康の側近であった成瀬家の菩提寺でもあり、地域に古くからある禅寺です。2013(平成25)年に荒井は本寺の襖絵を描き奉納しました。荒井はこの経験について「自身の表現が地域の人々とかかわるきっかけになった」と語っています。展覧会ではこれらの襖絵を展示し、寺院空間を再現します。祈りの空間としての襖絵を体感いただければと思います。

第2部は船橋市を代表する干潟・三番瀬で制作した映像作品と写真作品を展示します。作品と場所の関係性に着目し、地球を舞台に作品を展示したらどうなるかという問題意識から、干潟の三番瀬の浜辺に作品を設置し、2020(令和2)年正月に撮影。今回は本作完成後初めて公開する機会になります。

第3部では2020(令和2)年春に廃業した船橋市を代表する老舗割烹旅館であり国の登録有形文化財でもある「玉川旅館」の建物内に作品を設置して撮影した映像作品を上映します。「大勢の人が共に時間を過ごした生々しい場所であり、祝い事などで利用した特別な空間」を自身の墨と和紙の表現で再現することを目指しました。

このたびの展覧会は、船橋市が所蔵する絵画をはじめ、荒井が初めて取り組んだ映像作品や写真作品を展示する機会になります。これらの船橋をモチーフとした作品を作家の地元であり撮影地であるこの地で発表することは、地域の歴史や自然の魅力、そして人々の営みをアートを通して共有する機会となることでしょう。

なお、最後になりますが、本展覧会の開催と図録制作にご理解をいただき、ご指導とご協力を賜りました荒井恵子氏、貴重な作品をご出品いただきました茂春山宝成寺をはじめご所蔵者の皆様、ご協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

2021(令和3)年12月

公益財団法人船橋市文化・スポーツ公社
船橋市民ギャラリー

水墨画家 荒井恵子さんの仕事について

中川美彩緒

私が勤務する富山県水墨美術館は、1999年に開館した比較的若い美術館です。富山県には1981年にすでに県立近代美術館ができており、主に欧米を中心とした世界と日本の20世紀美術や現代美術、デザインを扱っていました。よって、後発の当館の基本理念と性格は、前述の館でカバーしづらいたところ、すなわち、日本文化に特有の美を再認識し、その魅力を発信することを掲げました。「水墨」を館名に付す美術館は他に例が見られませんが、富山県からは豊秋半二(1907-1992)や篁牛人(1901-1984)、下保昭(1927-2018)など優れた水墨画家を輩出し、コレクションの特徴となっていることと、日本文化の美を象徴させる言葉として「水墨」を選び、水墨表現そのものの新たな可能性にも期待したという経緯があります。

その方針のもと、現在進行形の水墨画の諸相を広く一般に紹介するとともに、墨によって表現することの意義と可能性をさぐるため、全国から水墨画を公募することになりました。「公募：墨画トリエンナーレ富山」展は2001年を初回に、3年に1度、2007年まで3回にわたって開催し、2、3回展は水墨画のルーツである韓国と中国にも参加を募っています。

荒井恵子さんの作品を当館が初めて展示したのは、2001年夏に開催したこの公募展の初回展でした。審査基準は、作品が今日の絵画としての表現たりえているか、そして何より墨で描く必然性があるかが重視されたので、古典に拠る型にはまったもの、趣味や余技的な作品は全く入選に届きませんでした。実績や画歴、作風を問わずさまざまな作家から350点近い応募があったなかで、52点が入選しましたが、精神性表現の可能性、造形性の自由さなどの点で、墨で描くことの意義を見出せる作品は決して多くはなかったといえます。

荒井さんは初回から果敢に意欲作を出品し、入選を重ね、3度目の挑戦となった2007年には奨励賞を受賞しました。

荒井さんが墨による制作を中心に本格的に作家活動を始めたのは1990年代半ばだそうだから、この公募展で見せた3作品の変化は、作家の試行錯誤の軌跡とみることもできるでしょう。2001年出品作《天と地の宴Ⅱ》(図1)は、具象的には描かれないものの、賑やかな都会の夜景と深い夜空を対比させたもの。墨による様々な技法が駆使されています。2004年出品作《心響》(図2)はより抽象へと移行しつつも、天と地をつなぐ巨大な光のクリスマスツリーを想起させる華やかな作品。そして2007年に奨励賞を得た《古代B》(図3)では、墨だけでなく植物染料も使い、形態の解放へと潔く力強く挑んでいます。絵画空間の構築が強く意識され、より深く素材との対話が行われました。破綻を恐れず抽象化を進めたこの時期、作風はより精神性を深めたように思われます。

また、早くからよく描かれる要素に、作家が自ら「命の玉」と呼んでいる円い形態があり、作風の抽象化が進むとともに、増殖する細胞のように画面いっぱいひしめいたり、うずまいたり、集まって不思議な生命体のようなものを形づくっていきます。この時期の代表作《阿吽》(図4)などがそのもっとも顕著な例で、絵の前に立って耳を澄ませば、うごめく命の鼓動が聴こえてきそうです。

求め続けた水墨表現に確かな手ごたえを得たところへ、次なる展開が訪れます。この度の展覧会でも紹介される茂春山宝成寺の襖絵制作です。荒井さんは約2年の月日をかけて2013年、《空》《宙》からなる12枚の襖絵を制作し奉納しました。寺院に現代的な抽象画とは、果たして相応しいのかと思う方は多いかもしれませんが、歴史的な禅寺の襖絵を描いてきた絵師は、等伯、蕭白、若冲などを筆頭に、その時代に生きた前衛的な水墨画家たちも多いのです。ご住職から依頼のあったテーマ「過去・現在、未来へと連なる命のつながり、見えないものとのつながり」は、荒井さん自身が制作にかける思いとそのまま通じるところでしょう。しかし、寺院という場の空間を演出する大作であり、そこに集う人々を包み込む空気感を考えることは、個展や展覧会とは異なって、美術そのものの根源的な力を問われることです。後に荒井さん自身がこの襖絵制作が大きな節目となったと振り返っていますが、眼前の絵画空間と自身の内的世界との交感だけにとどまらず、作品を置く場で、鑑賞者と共有できる感覚を求める制作へと発展する契機となったのではないのでしょうか。

もう一つの節目は、「百選墨」(性格の異なる百種類の墨)との出会いだといいます。個性豊かで美しい墨色に命を吹き込む制作は、2015年頃からずっと毎日欠かさず継続されているようで、「日々刻々」シリーズと名付けられています。膨大な量の大小さまざまな和紙一枚一枚に、前述した「命の玉」が実にさまざまな表情で登場し、見飽きることはありません。展示空間に呼応するインスタレーションが行われ、床に並べる、壁にピンナップ、空間に吊るすなど見せ方は自由自在です。

この「日々刻々」の作品群を見たとき、当館の「墨画トリエンナーレ」で審査員を



図1 《天と地の宴Ⅱ》



図2 《心響》

務め、同展図録*によせていただいた下保昭氏の言葉を思い出していました。

水墨画というのは、毎日描こうとする姿勢が大事なのだと思う。なぜかといえば、まず描かなければ自分が本当に描こうとするものが見つからないのである。水墨画は、墨、水、筆、そして紙、これらを自由自在に使いこなしてこそ、初めて作品を描くことができる。さらに、頭で考えているだけではだめで、描いて描いて描きまくることが大事なのである。

スケッチにしても心ゆくまで同じ対象を何回も何回も描くことが必要である。(中略)そういう描き方をしてこそはじめて、対象の背後に横たわる精神的なまでの描くことができ、訴えかける絵を描くことができるからなのだ。

水墨画は、自分の呼吸にあわせて描くべきものである。



図3《古代B》

少し長い引用になりましたが、「日々刻々」シリーズを手に取りながら、「毎日毎日、墨を擦り、眼前の墨と会話をしながら思いを託して描いている」と話していた荒井さんの言葉と重なるところが多く、荒井さんの柔和な語り口の内側にある、絵描きとしての激しさ、情熱、執念に触れた思いがしたのです。

2018年に公開された32枚の襖絵「起承転結」(越前和紙の里 卯立の工芸館)は、宝成寺での経験を発展させ、越前和紙そして百選墨との出会いに力を得て、作家の作風の変遷そのままに描かれました。4つの部屋を「起」「承」「転」「結」のテーマで描き分け、思いが生まれ、力強く成長し、転じて大きな動きとなり、再び新たな命へと結ばれていく。作家のここまでの集大成を示す大作です。「日々刻々」と姿を現すさまざまな「命の玉」たちは、さざめいたり、つぶやいたり、実に楽しげです。模索期の作品にあった貪欲な重苦しさから脱し、自由に息づき、見る者の思いと響きあっていました。

さて、富山県水墨美術館では、水墨表現の多様性と魅力を幅広い世代の人々に伝えるため、夏休みに子どもたちを対象とした水墨画のワークショップを開催しています。荒井さんが立て続けに大作に取り組んでいた2018年7月、当館では荒井さんに講師をお願いし、約40人の子どもたちが「日々刻々」を体験する機会を得ました。そして翌2019年3月には、開館20周年記念シリーズ展の先陣を切って、ワークショップの成果と講師作家の作品を紹介する展覧会「ひらけ墨画ワールド いろいろの墨のいる 荒井恵子と子どもたち」を開催しました。展示室1は荒井さんの代表作を展示し、展示室2はワークショップ参加者作品と、百選墨をはじめとする水墨画の画材や材料をお借りして紹介し、水墨画を多面的に知っていただく良い機会となりました。

こうした活動は、美術館を次世代につないでいくために必要な活動であり、荒井さんの惜しみないご協力を得て充実した内容での開催となりました。あらためて感謝いたします。

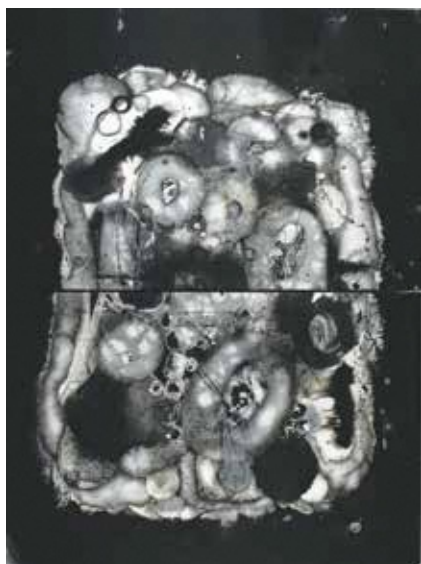


図4《阿吽》

宝成寺襖絵の制作が契機となって、荒井さんは視野を広げ、多くの可能性を手に入れました。今回の展覧会は、作家の活動拠点である船橋市で展開されてきた3つの取り組みから成るそうで、第1部は宝成寺襖絵、第2部では作品展示場所を自然環境に置き、映像表現とのコラボレーションへと発展しています。また第3部は老舗割烹旅館でのインスタレーションで、建物の歴史、人々の記憶という形のないものとのコラボレーションです。展示だけではなく会期中に行われるワークショップや授業も、寡黙に作品にのみ語らせるにとどまらない外部との積極的な交流の表れでしょう。

こうした展開は、現代を生きるアーティストとしては自然な成り行きといえるでしょうが、そもそも墨に特化した制作を続けている現代作家はそう多くありません。多くは墨も手がける、あるいは墨を他では得られない黒色として用いる作家が多く、墨を用いること自体に精神性表現の可能性を求める作家は少ないのです。作家・荒井恵子は、墨と和紙に行き着いた必然性を、高いレベルで作品に反映させている数少ない作家の一人といえるでしょう。

墨との対話を続けてきた荒井恵子さんは、これからどのように豊穡な世界を紡ぎだすのでしょうか。楽しみにその時を待ちたいと思います。

(富山県水墨美術館 館長)

*『公募：墨画トリエンナーレ富山2001』富山県水墨美術館、2001年

図版

図1《天と地の宴Ⅱ》2001年 墨／麻紙 161×129.5cm 作家蔵

図2《心響Ⅰ》2002年 墨／和紙 162×130cm 作家蔵

図3《古代B》2006年 墨、藍染の廃液、柿渋／和紙 130×162cm 谷野伸吾蔵

図4《阿吽》2008年 墨／和紙 各 194×130cm 富山県水墨美術館蔵

地域における現代美術の試み—荒井恵子の船橋三部作

山本雅美

はじめに

私は2017年から2021年にかけて船橋市の「市所蔵作品活用事業」に学芸員として携わった。「市所蔵作品活用事業」とは、船橋市が所蔵する美術品を活用することを通して、市民の美術活動や地域の文化振興を進めていくものである。この中で私が取り組んだ活動のひとつが、地域で活動するアーティストとの共働を通して、市民の人々、特に子供たちが美術に触れる環境を作っていくことであった。これは、私がかつとも現代美術を専門とする学芸員であったことも関係するが、船橋市には多くのアーティストが活動していることも大きな理由であった。

地域で活動するアーティストに注目した理由は、私がこれまで学芸員として現代美術をテーマにした展覧会やワークショップを企画していくなかで考えていたことに起因する。現在を生きるアーティストには、作品を制作するという使命と共に、もしくはそれ以上に、アーティスト自身が今の社会を生きて人々と交わることを通して、彼らが持つ独特の思考や実践を地域の中で活かしていくことで、アートという存在を社会の中で機能させていく、このような使命があるのではないかと考えたからである。とりわけ変化の多い先の読めない時代に生きる私たちは、未知なる世界に向けて目に見えない価値を造形化していくアーティストの創造力を必要としているのではないだろうか。私の考えるアーティストとは、今を生きる仲間として、世の中の常識やルールを軽やかに飛び越えた自由な地点から、人々を照らしてくれる存在である。そのような人々と市民や子供たちをつないでいく仕事を実践することが、2017年に船橋に来た私のひとつの目標であった。

本論では、そのような船橋でのアーティストと人々をつなぐ実践について、その最大のパートナーであった荒井恵子氏との活動を振り返ることで、アーティストが果たす社会的役割とその実践について考察してみたい。

アーティストによるワークショップ

私は以前、東京都現代美術館で学芸員をしており、ここでは現代美術を伝えるために展覧会やイベントの企画をしていた。そこで分かったことは、美術館で鑑賞することや現代美術に触れることは自然に身につくことではなく、家庭教育や学校教育のなかで学び、経験を積むことで培われる態度であり能力だということであった。

船橋市には公立美術館がなく、民間のアートギャラリーも存在しない。このような場所で美術を鑑賞すること、現代美術に触れるとはどのようにして可能になるのだろうか。まずは体験的に知ることから始めないと、地域において現代美術を実践することは成立しないと考え取り組んだのが「アーティストによるワークショップ」であった。

初めての「アーティストによるワークショップ」は、2018年夏の船橋市所蔵作品展の関連イベントとして西図書館で開催したものである。これは「岸田劉生と椿貞雄の日本画の世界」展という市所蔵作品から岸田劉生と椿貞雄の日本画を紹介する展覧会の関連企画であり、荒井氏に墨絵のワークショップを依頼したのである。

ワークショップというと、技法の体験や絵をうまく書けるように指導してもらう場所のようなイメージがあるかもしれない。しかし、私が目指した「アーティストによるワークショップ」は、椿貞雄や岸田劉生のような昔の人々と現代の私たちの感性をアートでつなぐことであり、その仲介役としてのアーティストに力を借りるというものであった。



西図書館ワークショップ(2018年7月22日)

この時の展示されていた椿貞雄や岸田劉生の作品は墨と和紙を使い、カブや柿などの野菜を描いたものが多かったこともあり、荒井氏は野菜をモチーフとして、そこから“感じた”ことを墨と和紙を使って“表現する”ことをテーマとしたワークショップを企画した。

この企画では、親子で同じものを見て、同じ道具と材料で、同じ技法で作品を描く、その活動を通してコミュニケーションをとることで思いもよらない関係性が生まれてくるのではないかと荒井氏の考えより、親子対象のワークショップとなった。それを可能にしたのは、墨と和紙というシンプルな材料を使って、このために開発した「水で描く」という技法を取り入れたからである。水や墨、和紙という自然のものが作り出す偶然の表現を受け入れる、そのなかから自分の想いを読み解いていく、荒井氏の表現方法の神髄に触れる体験になった。

このワークショップを実践することを通して、「アーティストによるワークショップ」というのは、技法を教えるものではなく、“表現”を引き出すものであり、それをアーティストの発想や技術を借りて実現する。アーティストがもつ発想、それを「アート思考」というならば、「アート思考を鍛えるためのワークショップ」であり、つまりモノの出来上がりの良さを目指すのではなく、そのプロセスで創造的な思考や体験をすること、共働的な創作の場をつくることで自己と他者の共存をしなやかにしていける感性と態度を育成することを目的として行うものである、という基本的なコンセプトが出来上がった(*1)。

美術鑑賞という体験

「本物を見る体験」、それが美術館の存在する意味ではないだろうか。

美術館のない船橋というまちで「本物を見る体験」をどのように作っていくか。船橋市所蔵作品を活用した事業を考える私にとって大きな課題であった。

その解決のひとつが学校や公民館を会場にした「出張美術展」だ。通常は美術品を展示する環境にないこのような場所に1日だけ作品を持ち出し展示する。もちろん作品の保存にとっては危険なことも伴い細心の注意が必要である。しかし、その展覧会に来る子供たちや地域の人々にとって、それがいかに得難い体験であることを感じるにつれて、「出張美術



北部公民館ワークショップ(2019年11月17日)



「船橋市出張美術展～豊富な美術／船橋の美術～」(2019年11月26日 船橋市北部公民館)

展覧会を企画した。市所蔵作品には石井柏亭、鶴三の作品がありそれらを紹介すること、船橋市ゆかりの芸術家の作品を過去から現在までを通して約20点の作品で紹介するものとなった。

この展覧会で荒井氏の《古代A》(2006年、船橋市蔵)を展示した。そしてアーティストによるワークショップも開催した。これは小学生を対象とした公民館の事業で、この時制作した作品は出張美術展の時に展示した。出張美術展では市所蔵作品を展示するだけでなく、この展覧会を通して行った学校連携授業の活動報告、ワークショップで制作した小学生の作品、近隣の豊富高校美術部員の作品など、地域の子供たちの美術表現を一緒にの空間で展示することを試みた。

展覧会は1日限りの開催であったが、荒井氏は会場で見学



葛飾中学校 鑑賞の授業(2021年6月21日)



葛飾中学校 ワークショップの授業(2021年6月28日)

展」の重要性を感じるようになった(*2)。

荒井氏は2019年の船橋市北部公民館での「出張美術展」に関わってもらった。北部公民館のある豊富町は、かつて鈴木鷺湖(1816-1870)という幕末江戸で活躍した絵師を輩出した土地で、この鷺湖の孫が石井柏亭(1882-1958)と石井鶴三(1887-1973)という大正・昭和期に活躍した近代日本美術史に名を残す芸術家であることから、その歴史を振り返るような展覧会を企画した。市所蔵作品には石井柏亭、鶴三の作品がありそれらを紹介すること、船橋市ゆかりの芸術家の作品を過去から現在までを通して約20点の作品で紹介するものとなった。

この展覧会で荒井氏の《古代A》(2006年、船橋市蔵)を展示した。そしてアーティストによるワークショップも開催した。これは小学生を対象とした公民館の事業で、この時制作した作品は出張美術展の時に展示した。出張美術展では市所蔵作品を展示するだけでなく、この展覧会を通して行った学校連携授業の活動報告、ワークショップで制作した小学生の作品、近隣の豊富高校美術部員の作品など、地域の子供たちの美術表現を一緒にの空間で展示することを試みた。

展覧会は1日限りの開催であったが、荒井氏は会場で見学に来た中学生を対象にアーティストトークをした。展覧会に展示されている作品を描いた本人に会う、その本人に作品について質問して話をすることが出来る、そのような体験は、美術鑑賞をするという点においても特別な体験になったことだろう。自分たちが鑑賞した作品は誰かが思いを込めて作ったものである、その当たり前のことを、荒井氏の存在という具体的な手掛かりをもって理解する。このように現

代アートを理解する方法として「本物の美術作品」とともに、アーティストという存在も一緒に届けていく、その可能性を感じた出来事であった(*3)。

アーティストが表現する地域の姿

2020年正月、私たちが「コロナ」という言葉はまだ知らなかった時、荒井氏は船橋市にある三番瀬という干潟に作品を展示して撮影した。墨と和紙を使って描いてきた人が映像に取り組み、その不思議さもあって、私も撮影に立ち会った。その後、あっという間にコロナウイルスがまん延し、人々の行動も社会も価値観も大きく変わっていった。

船橋市の文化を研究する私にとって2020年4月末に廃業した玉川旅館の存在は気がかりであった。5月に玉川旅館に絵画などの美術品があり調査が必要であるということで、人がいなくなった玉川旅館に入った。

同時に荒井氏にもこの玉川旅館を舞台に自身の作品をインスタレーションし映像作品にするというアイデアが生まれた。それは土地の記憶や人々の営みを残すことをアーティストとして行うことの決意であった。荒井氏のアイデアを聞いていくうちに、私自身も建築が伝えるこの土地の歴史を残すことは、学術的な研究による記録だけでなく、アーティストによって人々の記憶を造形化することでも可能なのではないかと考えるようになった。土地の歴史や人々の営みという“目には見えない思い”を“表現”していくという試みは、荒井氏のこれまでの墨と和紙を使った仕事と通じるものがある。本展覧会で《玉川》(2021年)という映像作品に結実したこの表現は、そのような長い時間をかけたアーティストと地域の関わりの中から必然的に生まれてきたものなのである。

おわりに

これまでの荒井氏との仕事は、私にとって「アーティストの社会的役割」について考え実践していく場所であった。それは、アーティスト自身が今を生きる人々や子供たちにその考えや技法を伝えていくことだけではなく、地域に残る記憶を造形化し未来へ継承していくことも含んでいた。アートを通して社会の人々の過去・現在・未来をつないでいく。それが「アーティストの社会的役割」なのだろう。

本論では荒井恵子氏の活動を軸に地域における現代美術の役割について考えてきた。船橋には多くのアーティストが存在する。彼らが活躍する場所を作り、市民や子供たちに彼らの表現を届けること。それを未来につないでいくこと。これこそ船橋市における現代美術の試みの可能性であろう。

(船橋市教育委員会学芸員)

- *1 2019年より船橋市民ギャラリーを会場に「アートを体験する3日間」という企画でアーティストによるワークショップを毎年開催している(2020年は中止、2021年は実施)。
- *2 船橋市出張美術展「椿貞雄の《赤富士》が小学校に帰ってきた」(船橋小学校、2018年2月1日)
船橋市出張美術展「豊富な美術／船橋の美術」(船橋市北部公民館、2019年11月26日)
- *3 この活動は2021年に実施した船橋市立葛飾中学校×荒井恵子 コラボレーション授業「モノトーンの美しさ～喜・怒・哀・楽を表現する」につながった。この授業は中学2年生を対象とし、最初に荒井氏の作品を鑑賞し、その次に墨絵ワークショップの授業を行った。この授業を通して墨絵を用いた表現方法の様々な可能性を生徒自身が感じるところになった。



玉川旅館の記憶を「日々刻々」の作品とともに、映像という形で残すことはできないかと思ったのは突然のことでした。

初めての映像作品「息づかい」の撮影から半年後の2020年6月に「玉川」の撮影を行いました、その間に世界は大きく変化してしまいました。

新型コロナウイルスが突然猛威を振るい、人々の行動や思考が混乱している中、私は地元船橋の地で約100年の歴史を持った老舗割烹・玉川旅館の廃業を知りました。ずっとこの地に寄り添い、たくさんの方が玉川旅館で時を過ごしてきました。私自身も新年会や忘年会で利用していましたし、宝成寺の襖絵(《空》《宙》2013)を遠方から見に来てくださった方々の宿泊場所としても利用させていただきました。新型コロナウイルス感染拡大防止のために、人と人の距離が離れ、集うことが困難となり、廃業を余儀なくされたことは、とても残念でありませんでした。

しかし、この場所で過ごした人々の記憶はなくなるものではありません。心の中に確かに存在し、記憶の中で生き続けるのだということを、誰もいなくなった玉川旅館を見て感じたのです。そうしているうちに、私自身にできることは玉川旅館の魂を、作品を通じて記憶に残すことだと考えるようになりました。そして、実際に玄関、大広間、風呂場、廊下、太宰治が執筆したと言われる「桔梗の間」でインスタレーションを行うと、「約100年もの間、船橋の人々に愛され、寄り添ってくれてありがとう」と感謝の気持ちが溢れてきました。昭和初期の日本建築の佇まいから、旅館ができた頃の賑わいや、そこに集う人々の声までもが聞こえてきたように思えました。

形がなくなってしまったからこそ、心に強く刻まれる記憶もあるのではないのでしょうか。

人も、場所も、人々の記憶の中に永遠に存在しうと思っています。



1

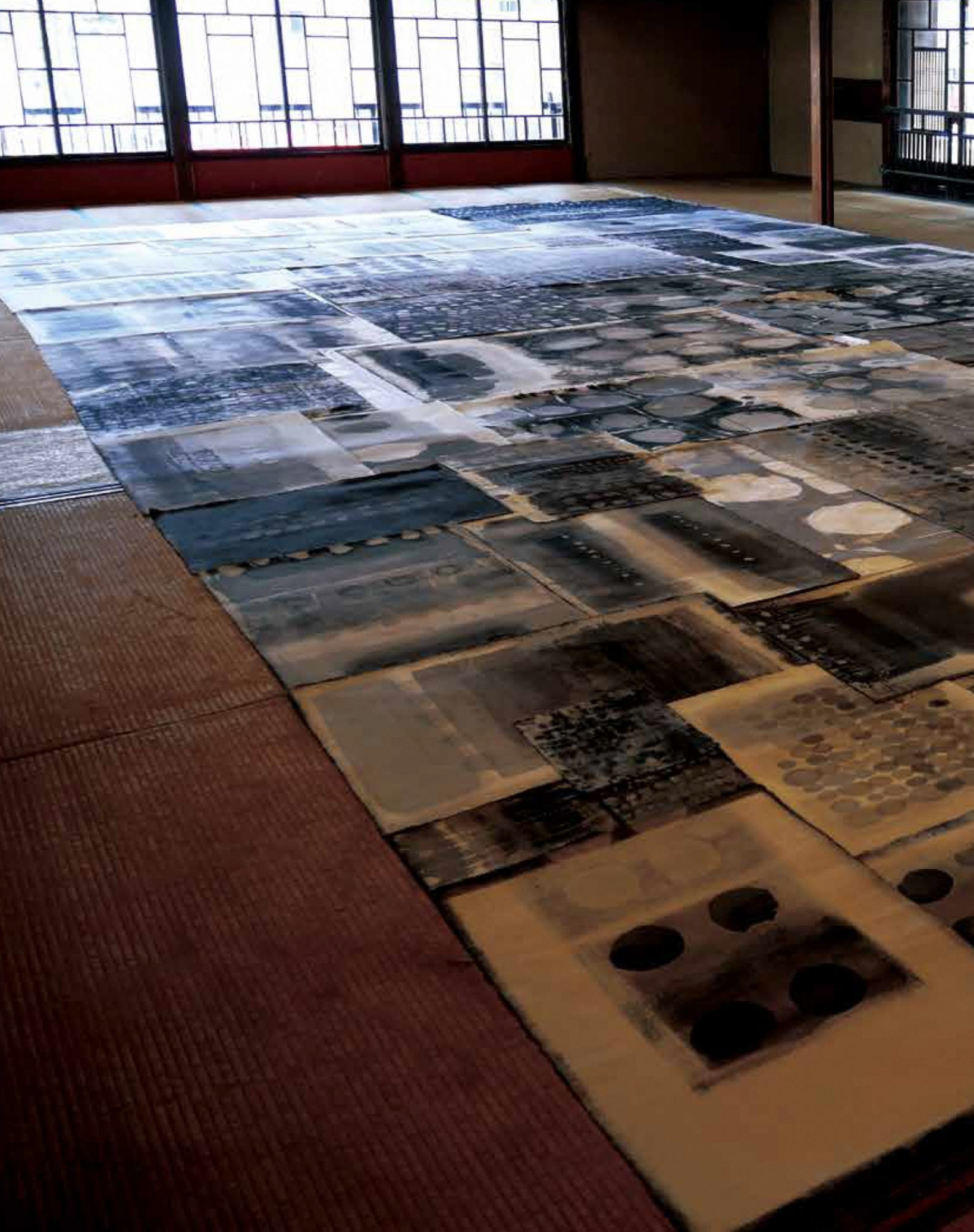








4







6



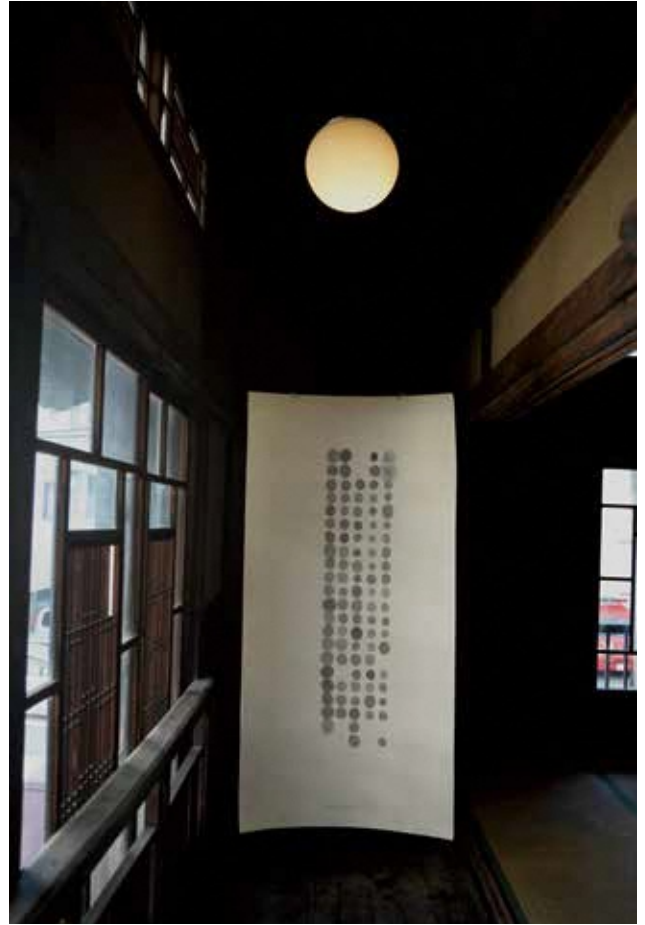
7



8



9



10



11



12



13



14



15

割烹旅館「玉川」

割烹旅館「玉川」は1921(大正10)年、かつて塩田であった現在の船橋市湊町で料亭の営業を始めた。「玉川」という屋号は、料亭を始めた小川家の当主の父、小川紋蔵が船橋大神宮の奉納相撲で名乗っていた四股名から付けたものである。かつては陸海軍の高級将校などが好んで訪れた。また、1935～36(昭和10～11)年に船橋市内で暮らしていた文豪・太宰治が滞在したとされている。

海岸の埋め立て以前には、目の前に広がる海を望みながらの宴会が開かれていた。埋め立てが進み、海岸が遠のいた後も、大勢の人が集まる宴会や結婚披露宴が執り行われるなど、「玉川」には人が集い、時代を超えて人々の記憶に残る場であった。



1958(昭和33)年に撮影された「玉川」
奥には建設中の旧市役所が見える。

本館・第一別館・第二別館の3つの建物は、2008(平成20)年に国の登録有形文化財となった。本館は1941(昭和16)年に建てられた木造2階建ての建物で楼閣風の外観を要していた。第一別館は1928(昭和3)年に完成し、1948(昭和23)年に増築。2階建ての第二別館は1933(昭和8)年に完成した木造建築、瓦葺きの建物である。2階の座敷は、間仕切りを取り払うと97畳敷の大宴会場となり、1階の客間は迷路のように配され、内部は数寄屋風の意匠を持っていた。



2020(令和2)年5月ドローンにて撮影

割烹旅館「玉川」は2020(令和2)年4月30日をもって閉館し、約100年の歴史に幕を閉じ、その後、取り壊しが行われた。船橋市は取り壊し前の5月に建物の記録保存を行った。解像度の高い4Kカメラにて館内外を撮影し、その場にいるような類似体験ができる360度VR画像を作成した。撮影した動画・静止画を編集した「玉川旅館博物館」本編(約9分30秒)、資料編(約16分30秒)、360度VR画像を市ホームページで公開しており、インターネット上で在りし日の姿を細部まで観ることができる。



市ホームページ

三番瀬



三番瀬について話すには、先に百の墨との出会いをお話しなくてはなりません。

2014年の終わり頃、奈良の墨運堂から一箱のダンボールが私のアトリエに届きました。開けてみると中には多種多様な墨たちがぎっしりと詰まっていた。真っ黒なはずの墨がダイヤモンドのように輝いて見えたことは今でも忘れられません。その百の墨は、煤の種類、膠の量、製造年が異なり、一つ一つに名前が記されていました。見たことのないたくさんの墨に初めは戸惑いを覚えました。次第にどのような墨色を魅せてくれるのかとワクワクしていきました。そして、実際に磨ってみると、1つとして同じ表情はなく、それぞれが個性豊かで、墨色や滲み方の違いに驚きました。それらの墨を何日も、何週間も黙々と磨り続けていたら、身体と意識が離れるような感覚となり、墨を磨る手は無意識のうちに鼓動や脈拍、呼吸に連動していて、内なる音が聞こえてきました。生きるリズムと共に手が動いているのだと気づき、このことを純粋に作品にしたいと思ったのです。

こうして、百の墨との出会いにより「日々刻々」というシリーズが生まれました。

さて、私のアトリエの近くに三番瀬という船橋の貴重な干潟があります。

私は事あるごとにその場所を訪ね、深呼吸をしに行きます。私にとって身近な場所であり、特別な場所でもあるからです。この船橋の干潟は東京湾の一部でもあり、その海は世界に繋がっています。

この浅瀬には多くの生き物たちが生息していて、それらを求めて水鳥や渡り鳥たちが集まってきます。そして遠くに目を向けると、船の行き来や東京のビル群が見え、私たちの生活が見えてきます。さらに太陽の動き、潮の満ち引きを見ていると、まるで地球が呼吸をしているかのように感じられます。三番瀬は地球の呼吸が見える場所なのです。「日々刻々」では自分自身の呼吸に向き合い描いていますが、私は自分の呼吸と地球の呼吸との関係を考え、自然を額縁として、映像作品に取り組むことにしました。そして、2020年の正月、《息づかい》を Grandpa Graphics, Inc. と共に撮影し初めての映像作品を創りました。

三番瀬の干潟はこれからもずっと、私にとって大切な場所であり続けます。





18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



三番瀬

三番瀬さんばんぜは東京湾の最奥部に位置し、船橋市をはじめ、習志野市、市川市、浦安市、各市の東京湾沿いに広がる約1,800haの干潟・浅海域である。深いところでも干潮時の水深が5mほどの浅瀬で、日々繰り返される干満により、土の中に酸素が供給され、多くの生きものを育てている。栄養豊かな浅瀬ではスズキやカレイなどの稚魚が育ち、成長した魚たちは、巻き網漁や底引き網漁で数多く水揚げされている。東京湾でとれたスズキは船橋の名物のひとつである。そのほか貝漁やノリの養殖も船橋の漁業の特色である。



江戸時代の絵図を見ると、今よりも広い東京湾の中に、「三番瀬」という地名を見つけることができる。船橋の漁師たちは、三番瀬を含む「船橋浦」と呼ばれた漁場で獲れた魚介類を、徳川将軍家に献上していた。江戸時代の中頃には、地震の影響によって漁獲量が減り、魚介類の献上は途絶えたが、明治になってからは、イワシなどの漁場として知られるようになった。戦後の埋め立てにより規模は縮小したが、現在でも、船橋の海では漁業が盛んに行われている。

2017年(平成29年)7月、ふなばし三番瀬海浜公園の旧温水プール棟を改修し、三番瀬の魅力を体感しながら三番瀬、さらには環境について親子で楽しく学べる「ふなばし三番瀬環境学習館」が開館した。この施設は「知る」・「考える」・「学ぶ」の3つのゾーンで構成され、三番瀬の自然や歴史などをテーマにした展示物や体験コーナーを設置している。また、週末には干潟の生きものや野鳥、植物、昆虫などの観察会、東京湾や船橋市の食材を活用した料理体験、ビーチコーミングや工作など、さまざまな切り口から三番瀬や環境の魅力を伝える活動を行っている。



ふなばし三番瀬海浜公園
ふなばし三番瀬環境学習館

宝成寺

2013年4月、開眼供養を終え12枚の襖絵を船橋市の宝成寺に奉納しました。宝成寺は450年前からある古刹で大変由緒ある寺院です。お寺には客殿としての2つの隣接する和室があります。その2つの空間を仏教の世界観でもある過去、現在、未来を表す、前世から現世、来世へと繋がる精神的な時空間《空》と《宙》で構想し、完成まで約2年間慈しみと愛を込めて襖絵を描き上げました。

お寺は、人生の生死、現在と過去、そして未来が交差する場所だと思います。また、今私達が時を刻んでいく尊さを実感することで過去や未来に向き合い、今をどう生きるか考える時間を与えてくれる場所でもあります。

命の終わりは次の命を生み出す力となり、それらの2つは表裏一体で、とても深いところで互いの世界は繋がっているのだと感じます。人の魂というのは、いつまでも心にとどめておくことができるのではないかと信じています。それは目に見えないけれど、そこに確かに存在するものだと思うのです。

12枚の襖絵で、想いが過去や未来に繋がる心の銀河「空」から、更にその先の漆黒の闇に浮遊する、深く美しい光と共に精神世界へとつながる「宙」を描き、2つの空間を創りました。

未来永劫、襖絵がお寺に息づき、訪れる人の心の奥深くで想いが繋がることを心より願っております。

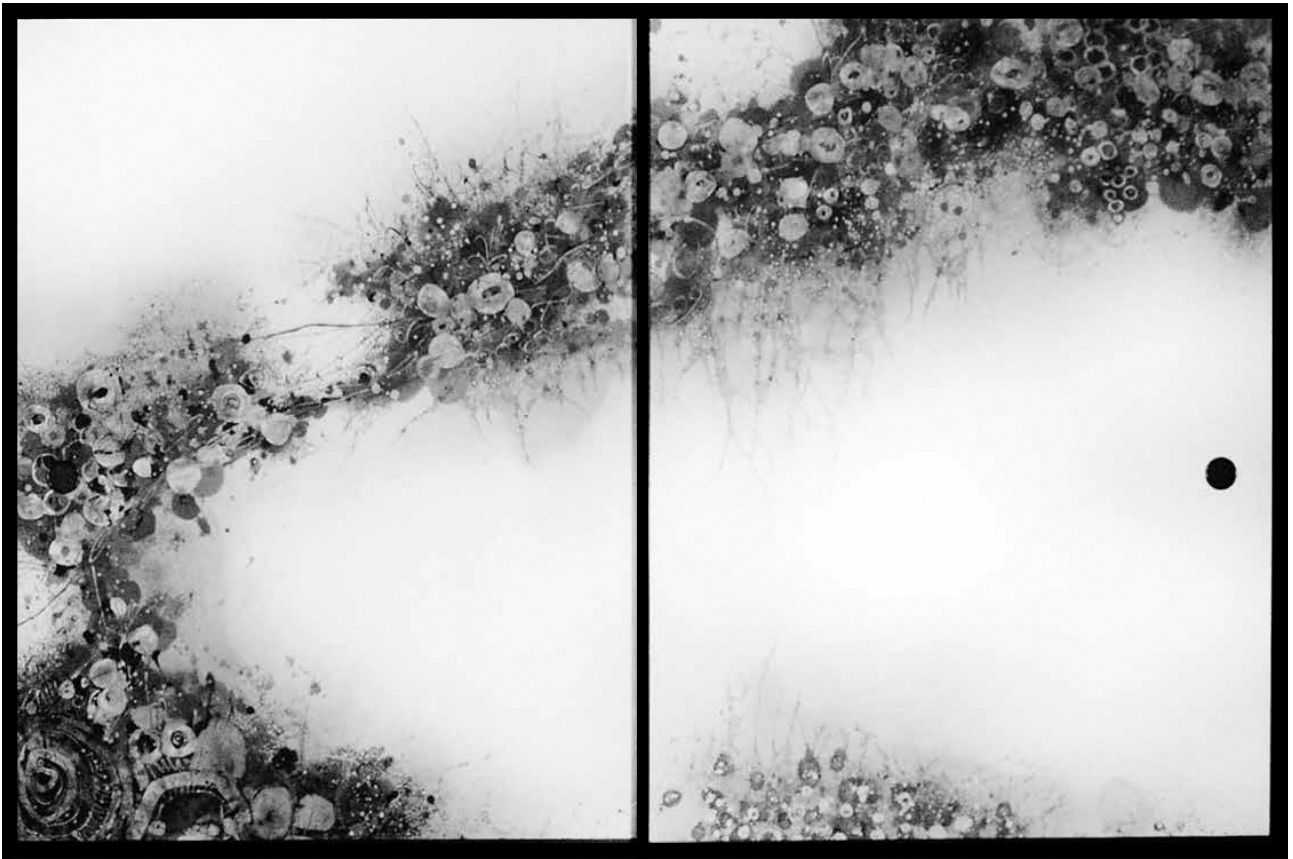




35

《空》

2013年 墨/和紙
各 176.5cm × 136cm
宝成寺





37

《宙》

2013年 墨、緑青、柿渋／和紙
各 176.5cm × 136cm
宝成寺



38



39

《宙》

2013年 墨、緑青、柿渋／和紙
167.5cm × 127.5cm
宝成寺



40

曹洞禅宗 茂春山宝成寺

宝成寺は成瀬氏ゆかりの曹洞宗の禅寺である。天正年間(1573~1591)に、現在の地(西船)に創立されたと伝えられている。徳川家康の側近の一人である成瀬正成(1567-1625)は、1590(天正18)年に軍功が認められ、栗原郷(現在の船橋市西部一帯)の領地四千石が与えられた。正成は領地内にあった法城寺を菩提寺と定め、城の字を成瀬の成の字に、法の字を宝字に替え、宝成寺と改めた。



宝成寺本堂



成瀬氏の墓

正成は大名に列せられ、1617(元和3)年には尾張犬山城主となった。正成の死後、次男の之成が栗原藩の後を継ぐも、1634(寛永11)年に没し、その息子も4年後に夭折。栗原藩成瀬氏は断絶したが、宝成寺は、江戸における成瀬氏の菩提寺とされていたので、栗原藩断絶後も犬山城の成瀬氏の墓の一部が営まれた。計18基の墓碑が現存しており、そこには、家臣や側室の墓が含まれている。一番大きな墓碑は7代目正寿のものである。

成瀬氏の墓所は、史跡として歴史的価値があるということで、1970(昭和45)年に市の文化財に指定された。

現在の本堂は2008(平成20)年に完成し、10月4日に本堂落慶法要が行われた。禅宗様という建築様式に基づいて建てられ、母屋の鏡天井には墨絵の雲龍が描かれている。また、旧本堂から受け継いだ松画がある。

荒井氏の襖絵《空》と《宙》は客殿にある。奉納された2013(平成25)年4月19日には本堂にて襖絵の奉納開眼供養が執り行われ、併催された「荒井恵子展—襖絵作家の近作特別公開—」では、掛け軸などの作品が展示された。



襖絵の奉納開眼供養の様子



【対談】

茂春山宝成寺住職 赤星隆誠×荒井恵子

(荒井恵子)2013年に奉納した襖絵《空》と《宙》を描いたときの状況と今のコロナ禍の状況は同じなんですね。襖絵を描いていた2011年には東日本大震災があり、現在は2020年から続いているコロナ禍の中にいる。今は目の前のコロナことばかり考えているけれど、私たちが生きている間には様々な大きな出来事が起こっています。例えば1995年の阪神淡路大震災。私は子供を産んで2年目ぐらいだったので、これからどうなるのかなとすごく考えた出来事でした。同じく1995年にはサリン事件もあって、2001年にはアメリカ同時多発テロ、2007年には新潟県中越地震があり、よく考えたらこのようにたくさん天災や事件が起きて、世の中が大きく動いてきた。そう思いながら今日の対談に来たのです。

このコロナ禍の状況下で、今回、船橋市民ギャラリーで個展を開催できるということには特別な意味があると考えています。今回、ご住職と宝成寺の襖絵について対談する機会をいただき、改めてこの作品について考えてみました。この作品を制作することを通してお寺という場所で表現させてもらったことが、私にとってすごく大きなことだったと思うし、自分のアトリエがあり地元でもあるこの地域でご住職と一緒に襖絵を描かせてもらった意味を改めて考える機会になったかと思っています。

ご住職との出会いは、2009年12月に船橋の市民文化創造館(きららホール)で上演された「トレモスのパン屋」の舞台でした。『トレモスのパン屋』(1993年、くもん出版)という第1回小川未明文学賞の優秀賞を取った小倉明さんが絵本を舞台にすることで、私が舞台美術を担当しました。そのとき地域で活動されていたご住職に出会ったわけです。

そのときご住職が話していたことが印象に残っています。「もともとお寺というものは地域の人たちに関わる場所であった。今生きている人たちにも来てもらって、交流を深めていきたいと思っている。そこで寺子屋のようなことをやりたい。」それを聞いたときに、素敵な考えだな、素晴らしい志だなと思いました。私はそのころ子育てをしていたので、そういう意味で、子供と共に地域に関わるということは、学校以外になかったし、あとは塾に行くぐらい。なので、お寺を寺子屋にしたいとお話しされていたことに感動したんです。

(茂春山宝成寺住職)茂春山宝成寺の今の本堂は2008年に新しくなりました。200年ぶりの建て替えでした。お寺はその昔役所であって、学校であって、ときには病院であって、地域のいろいろな人たちが集まってきて、皆さんが交流する場所だった歴史があります。しかし昨今、お寺は自分たちで敷居を高くして塀で囲み、周りの方々が入りづらい場所になってしまいました。200年ぶりの本堂建て替えをきっかけにして本来のお寺の姿に戻さなくてはいけないと強く思ったのです。

宝成寺の歴史をお話しすると、2008年というのはこの寺の初代住職の400回

忌でした。この寺は江戸時代、いまから約450年前に開山したのですが、もともとここにはどうやらお寺のようなものがあって、そこに曹洞宗の和尚さんが入って、曹洞宗のお寺になったのが茂春山宝成寺の始まりとされています。

ここには成瀬家の墓所があります。江戸時代初めのころ、初代の成瀬正成は徳川家康について江戸に入りました。初代の正成公の長男の正虎が犬山城を継いで、次男の之成が小栗原という地名のこのあたりを継ぎました。之成という人は若くして、30代で亡くなります。その供養のために鐘楼堂を建てたんです。本堂の前にありますが、今は鐘がついていません。これは第二次世界大戦中に銅の供出のために持っていかれたんです。私たちは之成公の菩提を弔うという意味でこの鐘を作ったんですが、それを戦争の時に持ってかれました。それが祖父の時代です。ですから今は鐘楼堂には鐘がないけれども戦争の時のことを忘れてはいけないからということで、そのまま残しているんです。忘れてはいけない歴史です。今はあまりにも時代の流れが速いのですが、変わらないものもある。やはりこのことは特に今の時代には大切なことだと思います。

本堂のなかの天井画は建て直した時に新しくしたんです。そして次に檀家さんや寺に来られる方が使う客殿のほうに何か記念になるようなものを作りたいとなったときに、襖絵が候補になり、荒井さんをお願いしたのです。

(荒井)2010年年末にそういうお話をいただきました。「2013年に向けて襖絵を描いて下さい」と。2011年の冬に和紙を準備しはじめました。なぜ冬なのかというと、寒い季節に漉く「寒漉きの和紙」が良かったんです。ご住職から私がいつも使っている越前の和紙を注文して、道具をそろえてくださいとありました。それが2011年の冬だったんだと思うんです。墨や和紙を注文しましたがまだ和紙が出来上がっていなかった3月11日に東日本大震災があったんです。

こういう時に新しい襖絵を作るということはいいのだろうか。こういう時にやるべきことなんだろうか。いろいろな考え方がありますから、私も悩みました。ご住職に「どうしますか?」と聞いたんです。「どのようになってでも私は構わないので、ご住職が決めてください」とお話ししたら、今でも覚えているのですが、ずっと黙っていらっしゃって、「こういうときだからこそ、やりましょう」と言って下さったんですね。確かにこういうときだからこそと、私も心からそう思って、「はい、わかりました」とお返事して、スタートしたのです。

(住職)特に荒井さんの作品は抽象的な作品なので、見る人それぞれがその人の心で見ると。このような時期だからこそ、荒井さんの作品のようなものが必要になってくるはずだと思いました。ぜひ、来た人に襖絵を見ていただきたい、力をもらってもらいたいと思いお願いしました。

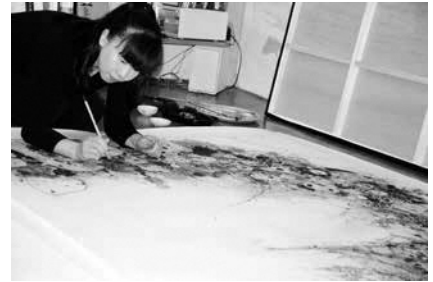
(荒井)お寺の襖絵はどうあるべきかをずっと考えていました。東日本大震災という大きな出来事がありました。でも前を向かなければならない。これは未来です。また歴史から学ばなければなりません。これは過去です。そして今がとても大事だということ。そういうことがつながるのがお寺なんだと思ったのです。

そしてお寺では手を合わせるわけですが、これは何に対して手をあわせているのかを自分なりに考えました。仏教の理念では決まった考えがあると思いますが、やはり私は願いが叶いますように、つまり未来が幸せでありますように、みんなが健康でありますように、平和でありますようにと祈ります。これからの未来を願うわけです。また、お寺には亡くなった方がたくさん眠っていて、そこに手を合わせるということは過去を見ている。つまりお寺というのは過去と未来がつながっている場所だと思ったんです。

(住職)過去・現在・未来がつながっている場所ですね。過去世、現世、来世ですね。

(荒井)空間として時空がつながっている。そういうことを感じられる場所はなかなか無いです。たくさんのお寺があるということは、それだけ私たちがそういう場所を必要としているんだということです。私も宝成寺に来るたびに時空がつながっていることをすごく感じたので、現世から来世、過去世につながっていくという表現をしたいなと思って、最初に襖絵《空》を描きました。襖絵がある庫裡には二つの部屋がありますが、手前の部屋には《空》。そして奥の部屋には《宙》を描きました。

ご住職にはそれ以前から私の作品を見ていただいていたので、《宙》の緑青を変化させながら描いた作品はこのお寺で初めて挑戦したものなんです。おそらくご住職は全く想像してなかったと思うので、《宙》を見てどう思われたかをお聞きし



たいと思います。

(住職)そうですね。何日も何日も見ました。見たんですけれど、やはり、毎回感じ方が違ってきます。今は海の中にいるようだけれど、次見たときは夜の空に浮かんでいるような気がするし、夢の中にいるような感じだし、毎回見たときの感覚が違う。それは結局なんだろうと思ったのですが、それは自分自身の心の状態を表しているということなんですよ。一回だけでなく何回も何回も襖の空間の中に身を置いてみるということが大事なんじゃないかなと思うのです。《空》と《宙》という全く違う空間を作ってもらえてよかったなと思いました。



(荒井)本来なら、途中ここまで描きましたよとか、こんな風に描いていますよと報告すべきだと思っていました。でも私はこの表現だと思って描き進めていたので、黙々と描いていました。《宙》の空間はお寺だからこそ挑戦できるだろうと精神世界を描くことにチャレンジしたんです。

(住職)2013年に作品が仕上がって、襖絵の開眼供養をしました。

(荒井)開眼供養には檀家さんや地域の方々がたくさん来てくれました。宝成寺の襖絵をきっかけに地域の人たちと近くなって、アトリエを訪ねてくる人もいたり、墨絵を教えてほしいと言って下さる人もいたり、歩いていたら挨拶されたりとか。そういう地域の方とつながるということがとても大切な事なんだと改めて感じる大きな転機になったなと思います。自分に向き合うということも、お寺という場所を通してご住職と出会ったこともあって、深く考えることが出来た。こういうところを含めて、私にはこの経験は大きなことだったなと思います。

(住職)襖絵を見た方の反応はいろいろありました。よく分からないという人もいれば、見た瞬間涙を流す人もいたり。皆さんがそれぞれ感じるというか、心が動くということが大事なのです。見る人がそれぞれその日の心のありように気づくことができる。見る人によっても感じ方が違うし、見る時によっても違う。いろいろな反応、心にわいてくるような感情、それが千差万別で、人によっても違うし、見るタイミングによっても違うし、それはとっても素晴らしいことで、荒井さんをお願いをしてよかったなと思います。



(荒井)私は、昨年からのコロナ禍のなかで改めて襖の意味を考えています。今までやってきたこと、地域の中でお寺が存在していく、地域とお寺が交差していくところでこのコロナ禍はどういう意味を持つのでしょうか？

(住職)これは、本当に、昨年からずっと思っているのですが、コロナというのは人と人とを断ち切っていくのです。それがずっとこの1年半続いている。いままではみんな力であわせて乗り切っていくんだというのがありました。しかしコロナに関しては距離を取らなくてははいけない。人間は本来、距離を取ったら生きていけないんですね。支え合いながら生きていくというのが本来の姿なんです。人は一人で生きていけないわけで、このコロナというのは、すごく人と人とを分断してしまったんですよ。だからそういうコロナ禍の中であって、人と人との関係性を再度見直して、本来あるべき姿、お互い支え合う姿、つまり人々が集っていくことの素晴らしさというのを、襖絵を見ていただくことで、今一度、再発見してもらおう機会になればよいと思います。



(荒井)心に寄り添って、対話できるのがアートだと思うし、お寺というのも単に場所ではなく、その空間が持つ力なんだと思います。そこに来たら本当に心が休まったりする。すごく大切な場所だし、見えないからこそ伝えていかなければならないものだと思います。私は絵を描きます。志を同じくする、お寺という場所がある。襖絵に時々会いに来て、ご住職とお話する。こうして襖絵がお寺の一部になってつながっていく。これがとても大切な事だと思います。今回の船橋市民ギャラリーの展覧会では、宝成寺の襖絵をお借りして展示しますが、これからもこの襖絵を見てもらう機会をいろいろ作っていきたいと思います。

(対談 2021年7月20日 茂春山宝成寺にて)

荒井恵子 プロフィール

- 1963(昭和 38)年 東京都生まれ
1997(平成 9)年 「現代水墨画協会展」秀作賞
「船橋市市制 60 周年記念 第 35 回船橋市「市展」(船橋市民ギャラリー)市長賞
「フィリップモリス・アートアワード最終審査展」(東京国際フォーラム)
1998(平成 10)年 個展「荒井恵子個展 Kids World 墨で描く子供の世界」(船橋市民ギャラリー)
「亜細亜現代美術展」(東京都美術館)理事長賞「ベトナム国際展」招待
1999(平成 11)年 「欧米国際公募：スペイン美術賞展」(東京都美術館)
「第 1 回トリエンナーレ豊橋」(豊橋市美術館)入選
2000(平成 12)年 「前橋アートコンペライブ 2000」(前橋市)
「欧米国際公募：チリ美術賞展」(東京都美術館)
「欧米国際公募：ドイツ美術賞展」(東京都美術館)
2001(平成 13)年 個展「荒井恵子展」(銀座 すどう美術館)
「公募：墨画トリエンナーレ富山 2001」(富山県水墨美術館)入選
「女流画家協会展」(東京都美術館)入選
「国際インパクトアートフェスティバル」(京都市立美術館)
2002(平成 14)年 個展「荒井恵子展」(船橋市 ギャラリーー樹)
個展「荒井恵子展」(南青山 ギャラリーープレンス・ビュ)
個展「荒井恵子一耳を澄ませて一」(トーキョーワンダーサイト本郷)
「女流画家協会展」(東京都美術館)入選
「欧米国際公募：イタリア美術賞展」(東京都美術館)
2003(平成 15)年 個展「荒井恵子一墨で奏でる心の響き」(白井市 ギャラリーーとりさ久)
「第 41 回船橋市「市展」(船橋市民ギャラリー)会員賞
「女流画家協会展」(東京都美術館)入選
2004(平成 16)年 個展「Happy Red & Sumi Keiko Arai」(南青山 フォルマクォール)
個展(フランス・オルレアン CENTRE D'ART CONTEMPORAINS D'OELEANS)
個展(フランス・パリ FRANCE MONTMARTRE DES ARTS)
個展「荒井恵子展」(日本橋 千葉銀アートギャラリー)
「国際公募：墨画トリエンナーレ富山 2004」(富山県水墨美術館)入選
2005(平成 17)年 個展「荒井恵子展」(西新宿 新宿プロムナード・ギャラリー)
個展「荒井恵子展」(千葉市 泉廊橋)
「第 3 回トリエンナーレ豊橋 星野真吾賞展 明日の日本画を求めて」(豊橋市美術館)入選
2006(平成 18)年 「縄文国際コンテンツポラリーアート展 in ふなばし 2006・縄文のエスプリ」(船橋市 飛ノ台史跡公園博物館)
個展「荒井恵子展」(西千葉 画廊椿)
個展「荒井恵子展」(麻布台 東京アメリカンクラブ玄関ギャラリー)
2007(平成 19)年 「縄文国際コンテンツポラリーアート展 in ふなばし 2007・出会いの造形」(船橋市 飛ノ台史跡公園博物館)
「国際公募：墨画トリエンナーレ富山 2007」(富山県水墨美術館)奨励賞
個展「荒井恵子」(千葉 ギャラリーーアートサロン)
「2007 CAF ネビュラ展」(埼玉県立近代美術館)
2009(平成 21)年 「仮説の推移」(アルメニア NAPK 現代美術館)
「2009 CAF ネビュラ展」(埼玉県立近代美術館)
「墨の位相—現代水墨画特別展」(東京都美術館)
2010(平成 22)年 個展「荒井恵子展」(西千葉 画廊椿)
「第 4 回墨の位相展」(東京都美術館)
個展「荒井恵子展」(大阪市福島区 LADS GALLERY)
2011(平成 23)年 「第 19 回国際丹南アートフェスティバル 2011」(越前市)(以後、2021(令和 3)年まで毎年出品)
「2011 CAF ネビュラ展」(埼玉県立近代美術館)
「2011 清州国際工芸ビエンナーレ、清州・清原ネットワーク展『韓紙+和紙 韓・日 現代美術展』(韓国忠清北海清州市 シエマ美術館)
個展「荒井恵子展」(西千葉 画廊椿)
2012(平成 24)年 「素材と表現 2012」(福井市美術館)(以後、2019(平成 31)年まで毎年出品)
「尖 SEN 18 回展」(京都市美術館)
個展「Keiko Arai」(フランス・パリ Galerie SATELLITE2)
個展「荒井恵子展 - 凜と飄 -」(大阪市福島区 LADS GALLERY)
2013(平成 25)年 襖絵《空》《宙》を曹洞禅宗茂春山宝成寺(船橋市西船橋)に奉納
「荒井恵子展—襖絵作家の近作特別公開—」(船橋市西船橋 曹洞禅宗茂春山宝成寺客殿)
個展「Au-delà de l'univers de Keiko ARAI」(フランス・パリ Galerie Lee)
「墨の架け橋」(フランス・カーン 聖ソヴァール教会)
2014(平成 26)年 個展「荒井恵子 分身—宝成寺襖絵、《空》《宙》の雫—」(銀座 MIKISSIMES GINZA ギャラリーー)
個展「荒井恵子展—襖絵 かこ、いま、みらい—」(大阪市福島区 LADS GALLERY)
個展「天地宇宙 襖絵 ひろがり つながる」(越前市 越前和紙の里 卯立の工芸館)
個展「Au-delà de ciel de Keiko ARAI」(フランス・パリ Galerie Lee)
「尖 SEN 20 回展」(京都市美術館)
2016(平成 28)年 個展「荒井恵子展 いろいろのいろ墨のいろ」(大阪市福島区 LADS GALLERY)
個展「荒井恵子展—いろいろのいろ墨のいろ—」(銀座 ギャラリーー新居東京)
個展「荒井恵子—日々刻々—」(内幸町 帝国ホテルアーケード 絵画堂 WINDOW GALLERY)
2017(平成 29)年 「第 17 回縄文コンテンツポラリー展 in ふなばし〜とび博でアート みいっけた〜」(船橋市 飛ノ台史跡公園博物館)
個展「日々刻々—いろいろないろ墨の色」(京橋 GALLERY RIN 鱗)
2018(平成 30)年 襖絵《起承転結》を紙祖神 岡太神社・大瀧神社(福井県越前市)岩千参百年大祭・御神忌に奉納し公開
「荒井恵子の世界 墨と和紙 そのあわい」(越前市 越前和紙の里 卯立の工芸館)
個展「荒井恵子 宙空回帰—さわる—かわる—つくる」(大阪市福島区 LADS GALLERY)
「第 18 回縄文コンテンツポラリー展 in ふなばし とび博 土偶のアート伝説 第一章〜伝説の土偶を探せ〜」(船橋市 飛ノ台史跡公園博物館)
「百の墨 荒井恵子 日々刻々—いろいろのいろ墨のいろ」(関市立篠田桃紅美術空間)
2019(平成 31)年 個展「百墨∞ Infinity 荒井恵子展」(日本橋 ギャラリーーサンカイビ)
個展「One Hundred Shades of Grey」(アメリカ・ロサンゼルス The Storrier Stearns Japanese Garden)
「墨展 sumi encre」(フランス・サン＝レミ Center culturel des Fosses d'Enfer)
2020(令和 2)年 個展「荒井恵子展 日々刻々」(市原市 ギャラリーー夢心坊)
個展「荒井恵子展 日々刻々」(熊本市 Gallery MOE)
2021(令和 3)年 「第 20 回縄文コンテンツポラリー展 in ふなばし とび博はくにもぐろう！〜縄文時代と対話する〜」(船橋市 飛ノ台史跡公園博物館)
「船橋ゆかりの作家 2 人展」(東武百貨店船橋店)
個展「令和 3 年度船橋市所蔵作品展 荒井恵子 船橋三部作 一宝成寺・三番瀬・玉川」(船橋市民ギャラリー)

収蔵・恒久展示

- 1995(平成 7)年 《夢の中》船橋市
1999(平成 11)年 《Communication》パルセロナ大学
2002(平成 14)年 《Symphony I》船橋市(東部公民館)
2004(平成 16)年 《天と地の裏 I》CENTRE D'ART CINETEMPORAINE/INSTITUT D'ARTS VISUELS
2013(平成 25)年 襖絵《空》《宙》曹洞禅宗茂春山宝成寺(船橋市)
2014(平成 26)年 《古代 A》船橋市
2018(平成 30)年 襖絵《起承転結》紙祖神 岡太神社・大瀧神社(福井県越前市)
2021(令和 3)年 《阿吽 — A-U》富山県水墨美術館

図版リスト

| No. | タイトル | 制作年 |
|-----|-------------|-------|
| 1 | 玉川(外観) | 2021年 |
| 2 | 玉川(玄関壱) | 2021年 |
| 3 | 玉川(玄関弐) | 2021年 |
| 4 | 玉川(上がり框) | 2021年 |
| 5 | 玉川(大広間壱) | 2021年 |
| 6 | 玉川(大広間弐) | 2021年 |
| 7 | 玉川(大広間参) | 2021年 |
| 8 | 玉川(硝子障子) | 2021年 |
| 9 | 玉川(板戸) | 2021年 |
| 10 | 玉川(廊下) | 2021年 |
| 11 | 玉川(大広間) | 2021年 |
| 12 | 玉川(硝子窓) | 2021年 |
| 13 | 玉川(湯場) | 2021年 |
| 14 | 玉川(桔梗の間) | 2021年 |
| 15 | 玉川(外観) | 2021年 |
| 16 | 息づかい—三番瀬 | 2020年 |
| 17 | 息づかい 1章 I | 2020年 |
| 18 | 息づかい 1章 II | 2020年 |
| 19 | 息づかい 1章 III | 2020年 |
| 20 | 息づかい 1章 IV | 2020年 |
| 21 | 息づかい 1章 V | 2020年 |
| 22 | 息づかい 1章 VI | 2020年 |
| 23 | 息づかい 1章 VII | 2020年 |
| 24 | 息づかい 2章 01 | 2020年 |
| 25 | 息づかい 2章 02 | 2020年 |
| 26 | 息づかい 2章 03 | 2020年 |
| 27 | 息づかい 2章 04 | 2020年 |
| 28 | 息づかい 2章 05 | 2020年 |
| 29 | 息づかい 3章 A | 2020年 |
| 30 | 息づかい 3章 B | 2020年 |
| 31 | 息づかい 3章 C | 2020年 |
| 32 | 息づかい 3章 D | 2020年 |
| 33 | 息づかい 3章 E | 2020年 |
| 34 | 《空》の間 | 2013年 |
| 35 | 《空》 | 2013年 |
| 36 | 《空》の間 | 2013年 |
| 37 | 《宙》 | 2013年 |
| 38 | 《宙》の間 | 2013年 |
| 39 | 《宙》—地袋 | 2013年 |
| 40 | 《宙》—軸 | 2013年 |

画像提供：荒井恵子

展覧会情報

令和3年度船橋市所蔵作品展

「荒井恵子 船橋三部作－宝成寺・三番瀬・玉川－」

会期：2021(令和3)年12月7日～19日

会場：船橋市民ギャラリー

主催：公益財団法人船橋市文化・スポーツ公社

共催：船橋市教育委員会

後援：船橋市

助成：芸術文化振興基金  / 公益財団法人 土屋文化財団

協力：株式会社東武百貨店船橋店 / 株式会社堀内カラー /

ギャラリーサンカイビ / Grandpa Graphics, Inc. /

船橋市立葛飾中学校 / 船橋市立習志野台中学校 /

茂春山宝成寺

令和3年度船橋市所蔵作品展

「荒井恵子 船橋三部作 一宝成寺・三番瀬・玉川」

企画・編集・執筆：山本雅美、益子実華(船橋市教育委員会学芸員)

発行：公益財団法人船橋市文化・スポーツ公社

〒273-0005 船橋市本町2-1-1 船橋スクエア21ビル3階

TEL 047-420-2111 <http://www.f-bunspo.or.jp/gallery/>

発行所：株式会社シンポウコーポレーション

〒273-0014 船橋市高瀬町32 TEL 047-495-0860

印刷・製本：株式会社総合印刷新報社

発行日：2021(令和3)年12月

表紙：荒井恵子《日々刻々「起」》2018年 墨 / 和紙

187cm×192.5cm 作家蔵

本図録の著作権は公益財団法人船橋市文化・スポーツ公社に、図版の著作権は作家に属します。したがって、この図録からの転載・複製・コピーおよびデジタル化等については、その使用目的の如何を問わず無断使用を禁止します(インターネットにおけるホームページ等の使用も同様)。

ご注文、乱丁・落丁本の交換等に関するお問い合わせは発行所までご連絡ください。

© Keiko Arai 2021

ISBN978-4-9911382-2-5 C0071

Printed in Japan